

# 『三彌底部論』の研究——我に関する章——

(中)

加 治 洋 一

本論は『仏教学セミナー』第42号に既発表の『三彌底部論』の研究(上)に続く一連の議論の解説研究である。論全体の構成等については(上)を参照して戴けたら幸いであるが、今回解説を試みる箇所も、(上)で紹介された五種の無我説に引き続き、正量部以外の諸部派が我についてどのような議論を展開しているかを整理している一節である。

## 二 解説研究(承前)

### Ⅱ 我についての他部派の見解

#### 2 我についての他部派の見解

② 我の存在・非存在の判断は控えるべきであるという主張

イ 我の相は規定できない

る。先ず、我の有無は論じてはならないという主張を五説、有我説を五種紹介し、次いで、我と五蘊との同異、我の常無常についての議論を紹介して行く。我についての論争は様様な視点から立場をかえ、よるべき主張によって文脈をかえ、涯しなくなされ続けて来たが、それはさておき、論点の整理の仕方としては右の項目は要を得たものであろう。輪廻の問題との関連でなされる中有关于の議論は別に章を立ててなされている。

又諸部説。不可言有我。不可言無我。何以故。答我相不可言故。若有我者可説。如行行相可説。如無為無為相可説。如是我我相可説。彼諸部見我相不可説故。是故有我無我不可説如是。

① 大正藏の「答」を宋元明三本によって「若」に訂正する。

ロ 捨置記である

復次何以故有我無我不可説。答直置問記故。何以故。問記有四種。一者

〈正量部〉復次に、何故、我が存在するとも、我は存在しないとも言つてはならないのか。

一問直記。二者先詰然後記。三者反問而記。四者直置不記。今者問我直置不記。是故不可言有我。不可言無我如是。

〈他〉捨置記(sthapaniya-vyakarana)であるからだ。つまり問答の型には四種ある。一は一向記(ekamsa-vyakarana)、二は分別記(vibhajya-vyakarana)、三は反詰記(paripriccha-vyakarana)、四は捨置記である。今取り挙げられている我の存在に関する問題は、これら四種の中、第四の捨置記である。それ故、我が存在すると言つてはならないし、我は存在しないと言つてもならないのである。

この主張は『成実論』無我品に「汝言無我。是事不然。所以者何。四種答中是第四置答。謂人死後若有、若無、亦有亦無、非有非無。若実無我、不応有此置答。」(大・32・259・下)とある主張と等しい。

又、『俱舍論』随眠品でもこの四記答に触れるが、そこでは有情と五蘊の一・異に関する問題が捨置記であるとす

復次何以故有我無我不可説。答定異合故。若有我便応可説。為是行為異行。為是無為異無為。此二種説既不定。是故不可言有我。不可言無我如是。

ハ 互に矛盾した規定が結びつく  
〔正〕復次に、何故、我が存在するとも、我は存在しないとも言つてはならないのか。

〔他〕或る規定と、それと矛盾した規定との両者が共に我と結びつくからである。

もしも我が存在するのであれば、それは有為法であるのか、それとも有為法とは異なるのか、或はそれは無為法であるのか、それとも無為法とは異なるのか、その孰れかに決定して説くことができる筈である。それにも拘らず、この二種の孰れが結びつくか本より定まっていな。それ故、我が存在すると言つてもならないし、我は存在しないと云つてもならないのである。

ニ 常でもあり、無常でもある

復次何以故有我無我不可説。答常無常合故。若有我可説。為是常為無常。

〔正〕復次に、何故、我が存在するとも、我は存在しないとも言つてはならないのか。

此二種説必必定而不定。是故不可説言有我。不可説言無我如是。

〔他〕常と無常とが共に結びつくからである。もしも我が存在するのであれば、それが常であるのか、無常であるのか、その孰れであるのかを説くことができる筈である。この二種の規定は必ず一方に定まる筈であるのに、〔我に關しては〕孰れとも定まらない。それ故、我が存在すると言つてもならないし、我は存在しないと云つてもならないのである。

ホ 有無の二辺である

復次何以故有我無我不可説。答有無

〔正〕復次に、何故、我が存在するとも、我は存在しないとも言つてはな

中依止故。仏告迦梅延。世間依二種。

らないのか。

亦依有亦依無。以是故執有執無。是故有我無我不可説如是。

〈他〉有と無という範疇を依り所としているからである。仏がカッチャーナ (Kaccāyana, Skt. Katyāyana) に寄せて説かれている

——世間の人人は二種の依り所、つまり有と無とに依って物事を把える。それだから、有に執われ、無に執われるのである、と。

この經典はⅡ 2 ①イで引用された雑 12、301 (大・2・85・下) の少し前の部分に「仏告毘陀迦梅延。世間有二種依。若有若無。為取所触。取所触故。或依有或依無。」とあるのに対応する。又、S. 12. 15 を参照。

③ 我は存在するという主張

イ 五蘊に繫縛されて次生に至ると説かれている

又諸部説実有我。何以故。語縛故。

又、幾つかの部派は、確かに我は存在すると主張する。何故なら、仏が繫

仏言。是色痛想行識繫縛。從此世渡

縛ということを説かれているからである。

彼。彼諸部見説繫縛故。是故有我如是。

仏は次のように言われている——この色受想行識という五蘊に繫縛されて、此の世から次の世へと続いて行く、と。

この幾つかの部派は、繫縛されるということが説かれているから、それ故、その客体である我が存在すると考える。

ここで引かれる経は、雑 3、74 (大・2・19・中) 及び S. 22. 117 (S. III. 164) と対応する。『成実論』はこの経を中有の存在証明の教証として挙げる (大・32・256・中)。

① 原文は「繫説縛故」。このままでは意味が取れないので改めた。

ロ 正見である

復次何以故有我。答正見故。仏言。

〈正〉復次に、何故、我が存在するのか。

有人見化生故。正見。彼諸部見正見。是故有我如是。

〔他〕それが正見だからである。

仏が次のように説かれている——或る人が化生の有情 (sattva upapādaka) がいると見るなら、それは正見である、と。

この幾つかの部派は、それが正見であるから、それ故、我が存在すると考へる。

以下類同の議論が幾つか現われるが、ātman と sattva, pudgala が同義語であることに基ついた議論である。sattva, nara, manuḥ, mānava, poṣa, jiva, pudgala, jantu 等等が, ātman と同義であるとの了解は、『俱舍論』破我品 (AkBh. p. 465, 大・32・154・上) に引用される雑 13・306 (大・2・87・下) に明らかであるが、同様の主題が様様な形で阿含ニカーヤ中に散見される。右の議論はその中、sattva が “astī” と説かれている、と云うのである。

尚、*jjj* で引かれてゐるのは M. 3. 117 Maha-Cattārisaka S. (M. iii. 72) の一節である “Katamā ca, bhikkhave, sammāditthi sāsavaṃ puññābhāgiyā upadhivapakkā? Atthi dinnam, atthi yittham, atthi hutam, atthi sukata dukkatānam kammanam phalam vipako, atthi ayam loko, atthi paro loko, atthi mātā, atthi pitā, atthi satta opapātikā, atthi loka samanābrāhmaṇā sammaggatā sammāpannā ye iman ca lokam parā ca lokam sayān abhinñā sacchikatvā pavedentī, ayam, bhikkhave, sammāditthi sāsavaṃ puññābhāgiyā upadhivapakkā.” *jjj* う部分に対応するが、これと平行する漢訳、中阿含 189 聖道経 (大・1・735・下) は右の中で化生を欠く。念の為にその一節を掲げておくと「云何正見。謂此見有施有斎、亦有呪説、有善惡業、有善惡業報、有此世彼世、有父、有母、世有真人往至善处、善去善向此世彼世、自知自觉自作證成就遊。是謂正見。」として化生の有情のみを欠いている。化生に関する各部派の見解の相違の反映かどうか、対応する一節を持つ雑 37・1039 (大・2・271・中) でも平行経の A. X. 176 には化生が説かれているのに対し、漢訳は化生を欠いている。

『俱舍論』破我品 (AkBh. p. 463, 大・29・155・中) でも私の存在証明の教証としてこの經典を引くが、右に示した部分より少し前の「云何邪見……」の一節である。

ハ 四念住の主体である。

復次何以故有我。答仏説四念故。仏

言。觀見身受心法。若無我無可見四

法。彼諸部見。仏説四念故。是故有

我如是。

〔正〕復次に、何故、我が存在するのか。

〔他〕仏が四念住を説かれているからである。

仏は次のように言われている——身と受と心と法とを觀察する、と。

もしも、これら身受心法の四とは別に我が存在しなければ、「觀察する主体がなくなり」この四法を見ることはできない。

この幾つかの部派は、仏が四念住を説かれているから、それ故、我が存在

すると考える。

『論事』1・231に同じく四念住の主体としてブドガラを措定する議論がある。

ニ 声聞の過去が説かれている

復次何以故有我。答仏説声聞故。仏

言。有人事火自炙其身。勤人自炙。

以是故仏説有人。如是。若無人自無

炙。亦無他可炙。彼諸部見。仏説有

人。是故見有我如是。

〔正〕復次に、何故、我が存在するのか。

〔他〕仏が声聞について次のように説かれているからである。

仏が次のように言われている——或る人(Pudgala)がいて、火を祭祀し、

自ら自分の身体を炙り、又、人に勧めて自らを炙らせていた、と。

この仏の言葉から分かるように、仏はブトガラが存在すると説かれている

のである。もしもブドガラが存在しなければ、自ら自分の身体を炙った者も

いないことになるし、炙らせた他の者もいなかったことになる。

この幾つかの部派は、仏がブドガラが存在すると説かれたと考え、それ故、

我が存在すると結論する。

II 2③ロと同様の議論で pudgala が “asti” と説かれていることを根拠に、行為の主体である我が存在を主張している。尚、右の事例は雑 38・1074 (大・2・279・上)等に現われるウルヴェーラ・カッサパ(Uruvela-Kassapa)のこと

かと思われるが、厳密に一致する文章がある訳ではない。

ホ 一人のブドガラが世に生じると説かれている

復次諸部何故説有我。答一人出世人得安樂生故。仏語。諸比丘。一切功德人生在世間。多人得安樂故。若無人誰生功德。是諸部見一人生故。是故有我如是。

〔正〕復次に、幾つかの部派は、何故、我が存在すると主張するのか。〔他〕一人のブドガラが世に出現して、多くの人が安樂な生涯を送ることが出来る〔と説かれている〕からである。

仏が次のようにお説きになっている——比丘達よ、一切の功德を備えたブドガラが生まれて、この世間に在ると、多くの人が安樂を得る、と。このように説かれているからである。

もしブドガラがいなければ、一体誰がこの功德を生じると言うのか。

この幾つかの部派は、一人のブドガラが生じる〔と説かれている〕から、それ故、我が存在すると考える。

これもⅡ2③ロヤニと同類の議論である。引かれている経は、増8・2(大・2・561・上)及びA. I. 13(A. I. 22)に対応する。『論事』1237もこの経を引きブドガラ有りとし、『成実論』(大・32・259・下)もこれを引いて我有りとする。又、『俱舍論』破我品(Alb. p. 468. 大・29・155・中)もこの経を引くが、そこではブドガラと五蘊とが別のものであるとする主張の教証として引く。

### 3 ブドガラと五蘊との関係について

#### ① 五蘊がブドガラであるとする主張

又諸部説五陰是人是我。問曰。何以故。答説界門故。仏語。比丘。六界

又、幾つかの部派は、五蘊がブドガラであり、我である、と主張する。何故なら、六処が「ブドガラである」と説かれているからである。

門六触是人。彼諸部見。仏説六界門六触是人。是故是人如是。復次何以

仏が語られている——「眼耳鼻舌身意の」六処と六触がブドガラである、と。この幾つかの部派は、仏が「六処と六触がブドガラである」と説かれ

故是人無異人。答仏説。外国有最上女人修多羅等故。仏言。我所説是最上女人。若白若黒若青若細滑。若方若長若短若細腰若肥。即是人更無異人如是。又仏語比丘。有人見一比丘可憎。若短若瘦若癯<sup>①</sup>如是。復次仏説。我天眼見衆生可愛可憎等。如是。復次説彼地獄人。如燒積薪燒地獄人亦復如是。前所説最上女人等。及見比丘可憎。仏見衆生可愛可憎。乃至燒地獄人如燒積薪等。但是五陰是人更無異人。是諸部見仏説陰是人。是故是人如是。

ているから、それ故「五蘊が」ブドガラであると考え。

〈正〉復次に、何故「五蘊が」ブドガラであつて、ブドガラと別のものではないのか。

〈他〉仏が『外国に最上の女人あり』という経を初めとする幾つかの経をお説きになつてゐるからである。

仏が説かれてゐる——色白であるとか、「髪は」黒く「瞳は」青いとか、「肌は」細やかで滑らかであるとか、端正ですらりと背が高いとか、どこそこは短いとか、腰は細くくびれ、どこそこは豊かに盛り上がつてゐる云云、と私が説いたのは最上の女人について語つたものである、と。

即ち、「仏が様様に挙げられた特徴は総て」紛う方なくこれはブドガラであり、ブドガラ以外の何物について説かれてゐるのではない。

又、仏が語られてゐる——比丘よ、或る人が一人の比丘を憎らしいと思つた。彼は背が低く、瘦で癯だ、と。

復次に、仏が説かれてゐる——私は天眼で衆生の愛すべき者や憎むべき者等を見る、と。

復次に、仏が地獄の人について説かれてゐる——積み上げた薪を焼くのと丁度同じように地獄の人を焼く、と。

以上、右に引いた「最上の女人」を初めとして、「比丘を憎らしく思う」「仏が衆生の愛すべき者や憎むべき者を見る」乃至「地獄の人を積み上げた薪を焼くように焼く」等は、皆正しく五蘊について言つており、しかもそれはブドガラであつて、全くブドガラ以外の何ものでもない。

この幾つかの部派は、仏が、五蘊がブドガラであると説かれているから、それ故、「五蘊が」ブドガラであると考える。

①大正は「躍」とするが、宋元明三本に従って「躡」とする。

②この經典は中阿含64天使經(大・1・503・上)及びM. 130 Devadūta S. に対応する。『論事』1 198にもこの經を引くが、ここでは五蘊との關係についてはなく、ブドガラ有りとする説の教証とする。

② ブドガラと五蘊とは別のものであるとする主張

イ 重荷を担う人の譬え

又諸部説人異五陰。何以故。答如担重担人故。仏言。重担是五陰。担者是人。如是。以是故人与陰各。是故人与陰異如是。

又、幾つかの部派は、ブドガラは五蘊と別のものであると主張する。何故なら、重い荷物を担う人のようなものだからである。

仏が説かれている——重い荷物とは五蘊であり、担う者とはブドガラである、と。

それ故、ブドガラと五蘊とはそれぞれ独立したものであり、それ故、ブドガラと蘊とは別のものである。

この經典は、雜3・26(大・2・19・上)及びS. 22, 23(S. III, 26)に対応する一節を持つ。

ロ 取と愛とを持つものである

復次何以故人異陰。仏言。人取愛為其第二久遠輪轉。是故人与愛異。以

是故人与陰各如是。

〔他〕仏が言われている——人は取(upādāna)と愛(trṣṇā)とを第二のもの〔即ち所縁〕として、久遠に生死に流轉する、と。

それ故、ブドガラと愛とは別のものであり、それ故、ブドガラと蘊とはそれぞれ独立したものである。

ハ 業の果報を受ける主体である

復次何以故人与陰各。答受業果故。

仏説偈言。

生世樂歡喜 異世樂欣然

作福二処歡 自見其業淨

此世業報竟 來世復應受

陰壞隨業往 更受異陰身

彼諸部見受業報故。是故人与陰各如是。

〔正〕復次に、何故、ブドガラと五蘊とがそれぞれ独立したものであるのか。

〔他〕業の果報を受けるからである。

仏が偈を説いておられる。

此の生涯で楽しみ歡喜し、次の生涯でも楽しみ欣喜する。

福徳を為せばこの世と次の世の二ヶ所で歡びを得、自ら自身のなした清

淨な業を見ることができると。

此の世で受けるべき業報が尽きても、次の世で更に受けなければならぬ。

蘊が壊滅しても、引き続き業に随って往き、更に別の五蘊の和合した身体を受取る、と。

この幾つかの部派は業の果報を受けるから、それ故、ブドガラと五蘊とはそれぞれ独立したものであると考える。

この前半の偈を『成実論』が引いて「又仏説。今喜後喜。為善兩喜。若但五蘊。不応兩喜。」(大・32・259・下)と有我の主張の論拠としているのも同じ主張であろう。『成実論』ではこれに対して「又汝言為善兩喜者、經中仏自遮是事言。我不説有。捨此五蘊受彼蘊者。但以五蘊相續不異。故言兩喜。」(大・32・260・上)と批判する。又ブドガラと五蘊との不一不異の主張に対して再度これを引き「又汝雖言然与可然不一不異。然眼見異相。我与五蘊亦応有異。又五蘊失而我不失。以此間没、至彼間生、有兩喜故。若隨五蘊有失有生、則同五蘊不名兩喜。汝以妄想分別是我得何等利。」(大・32・260・中―下)と論難している (cf. III. 3. 26)。尚、この偈の前半は Dhp. 16 と符合する。

ニ 過去世の何某は私であると説かれている

復次何以故人与陰各。答是我説故。

〔正〕復次に、何故、ブドガラと五蘊とがそれぞれ別個のものであるのか。

仏言。我前世時作轉輪聖王。名曰善

〔他〕「仏がかつての何某は」私であると説かれているからである。

見。亦名大天。以是故今受新陰前我  
不異。是故人与陰各如是。

仏が次のように説かれている——私は、前の生涯の時には転輪聖王であり、  
名を善見と言ひ、又、大天とも言った、と。  
従つて、今新しい五蘊を受けても、「私そのものは」前の私と異ならない  
のであるから、それ故、ブドガラと五蘊とはそれぞれ別個のものである。

この経も『成実論』が引く。「又十二部經中有本生經。仏自説言、彼時大喜見王我身是也。如是等本生、今五蘊非  
昔五蘊、是故有我從本至今。」(大・32・259・下)と、この論と同一の主張を載せている。但しこれに対する批判は「又  
汝言有本生者、因五蘊故、名喜見王。即彼蘊相統故名仏、故説我是彼王。」(大・32・260・上)としており、この論の反  
論とは異なっている (cf. III ②二)。

又これとほぼ平行した議論が『俱舍論』破我品に見られ「若唯有蘊、何故世尊作如是説、今我於昔為世導師名為妙  
眼。此説何咎。蘊各異故。若爾是何物。謂補特伽羅。昔我即今体応常住。故説今我昔為師言。頭昔与今是一相統。如  
言此火曾燒彼事」(大・29・156・下)とある (AKBh. p. 472)。

ホ 常・無常が言及されていない

復次何以故人与陰各。答無記処説故。  
〈正〉復次に、何故、ブドガラと五蘊とがそれぞれ独立したものであるのか。  
〈他〉「ブドガラの常・無常は」無記に含まれる問題であるからだ。

仏は「蘊は無常である」と説かれているが、「ブドガラは無常である」とは  
説かれない。或る場合には「蘊は無常の相をしている」と説かれ、或る場合  
には「蘊は常の相をしている」と説かれている。つまり常相と無常相とはそ  
れぞれ全く異なった相である「にも拘らずブドガラの常・無常については言  
及されていない」。

それ故、「常・無常が説かれない」ブドガラと「それが言及される」五蘊  
とはそれぞれ独立したものである。

#### 4 プドガラの常・無常について

##### ① プドガラは常であるという主張

##### イ 本源がない

又諸部説人は常。何以故。答無本故。人不心生死中行。如仏所説。生死無本衆生輪転。生死源本不可知如是。

是故人無本。若人無本亦無其末。是故人常如是。

又、幾つかの部派は、プドガラが常であると主張する。何故なら「プドガラには」本源がないからである。つまり、プドガラそれ自体は生死とは無関係な存在である。

例えば仏が次のように説かれている——生死には本源と云えるものではなく、衆生 (sattva) は「無窮に」流転する。この生死の本源を知ることができない、と。

それ故、プドガラには本源はなく、プドガラに本源がない以上、又その終末もない。従って、プドガラは常である。

この議論も Puggala 2 satta が同義語とあることが前提となつてゐる。引用される經典は、雑 10・11 (大・2・69・中) 及び S. 22. 99 (S. 1. 149) と対応する。『論事』159で矢張りこの経を引いてプドガラの転生の論拠とする。

##### ロ 過去世のことを記憶している

復次何以故人常。答憶過去世故。仏

〈正〉復次に、何故、プドガラが常なのか。

言。憶一生乃至憶過去無数劫生。陰

〈他〉過去世のことを記憶しているからである。

壞雖流転生死而人不壞。彼諸部見。

仏が次のように説かれている——一生のことを記憶しているし、乃至過去

憶一生乃至憶過去無数劫生故。是故

無数劫の生涯のことを想起する、と。

人常如是。

従って、五蘊が壊滅し、生死に流転しても、それでもプドガラは壊滅しないのである。

この幾つかの部派は、一生のことを記憶しているし、乃至過去無数劫の生

涯のことを想起するから、それ故、ブドガラは常であると考え。

過去の生涯の記憶については阿舎ニカーヤ中所所に見られるが、例えば中阿舎208箭毛経(大・1・785・下以下) M. 79 Cūḷa-Sakuḷudāyī S. 等がよく符合する。尚、憶念の境、憶念の主体について、それを我の有無の問題として『俱舍論』破我品 (AKBh. p. 472, 大・29・156・下〜157・上) で議論している。

ハ 彼岸に永住する

復次何以故人常。答說処故。仏言。

〔正〕復次に、何故、ブドガラが常なのか。

渡彼岸住彼地名婆羅門。如是。仏復

〔他〕「永住する」場所が説かれているからである。

言。既已渡彼岸更不復還。如是。仏

仏が説かれている——彼岸に渡り、その地に留まる者が婆羅門である、と。

復說。渡彼岸者住彼処不墮落。既至

さらに仏が説かれている——既に彼岸に渡り終えた者は、決して再び還

彼岸無復憂惱。如是。若人見渡彼岸

てこない、と。

者。住彼処不墮落。無憂惱故。是故

さらに、仏が説かれている——彼岸に渡った者は、その地に留まって、そ

人常。彼諸部見。仏說処故。是故人

こから墮落することはない。既に彼岸に至った以上、再び憂い悩むことがな

常。

い、と。

もしも人が、彼岸に渡ったことに気付けば、彼はその地に永久に留まって

墮落することはない。そこでは憂悩することがないからである。それ故、ブ

ドガラは常である。

この幾つかの部派は、仏が「永住する」場所を説かれているから、それ故、

ブドガラは常であると考え。

ここで引用される経は例えば Dh. 414 を想起させるし、或は「身死不墮数、永処般涅槃」の類の一句を共有する  
雑17及び S. 36 の一連の経を連想させるが孰れも正確には一致しない。しかし主張そのものは明解である。

ニ 不動の樂に至る

復次何以故人常。答至不動樂故。仏説偈言。

如是正解脱 渡欲淤泥流

智者莫能測 得至無動樂

彼諸部見。仏説至無動樂故。是故人常。以是人至不動樂無陰故。是人不可知處。是故人常如是。

引用されている偈は Udāna 8. 10 の後半に対応する。<sup>補注</sup> 378・中にも現われる。

又諸部説人無常。問何以故。答有本故。仏語比丘。有一人生為一切人安樂。如是。若有生有其本。若有本有其末。是故人無常如是。

〔正〕復次に、何故、ブドガラが常なのか。

〔他〕不動の樂に至ることがあるからである。

仏が偈を説いておられる。

そのように正しく解脱し、欲望の淤泥の流れを渡る。

智者も「その行着く先を」推し測ることができないが、不動の樂に至ると。

この幾つかの部派は、仏が「不動の樂に至る」と説かれているから、それ故、ブドガラは常であると考える。つまり、このブドガラは不動の樂に至るに当って五蘊を伴わないからこそ、その趣く所を知ることがないのである。

〔つまり無常なる五蘊とは独立しているから〕それ故、ブドガラは常である。

## ② ブドガラは無常であるとする主張

イ 本源がある

又、幾つかの部派は、ブドガラは無常であると主張する。何故なら、本源があるからである。

仏が語られている——比丘よ、一人のブドガラが〔この世に〕生まれて、総ゆる人を安樂にする、と。

もしも生まれるということがあるのなら、その本源があることになる。本源があるのなら、その終末がある筈である。それ故、ブドガラは無常である。

ロ 「新生」ということが説かれている

復次何以故人無常。答仏説語新故。仏言。新生天好顔色端正威徳。新者無常法名新。是故人無常如是。

〔正〕 復次に、何故、ブドガラが無常なのか。  
〔他〕 仏が「新たに」と説かれたからである。  
仏が説かれている——新たに生まれた天は素晴らしい。容貌は端正であり、威徳がある、と。

ここで「新たに」と言われたのは、無常法を指して「新たに」と言われたのである。それ故、ブドガラは無常である。

ハ 「斃れる」ということが説かれている

復次何以故人無常。答倒法故。仏言。

波斯匿王雖為人王。異世時倒如是。

若有倒法成無常。是故人無常。

〔正〕 復次に、何故、ブドガラは無常なのか。  
〔他〕 「ブドガラが」斃れるものであるからだ。  
仏が説かれている——パセーナデー (Pasāṇadī) 王は、「この世では」人民の王であったが、世を去る時には、地に仆れ「て命終し」た、と。  
斃れるということがあれば、それは無常である。それ故、ブドガラは無常である。

この事蹟は、『有部毘奈耶雜事』第八(大・24・239・上)等に記されている。パセーナデー王の最期のことであろう。「王既飢虚根葉俱食。食已思渴即往水辺。過量而飲因成霍乱。身体羸弱。思憶勝鬘。涉路前行轍中倒也。口銜末土。因即命終。」とある。

ニ 没し生じる

復次何以故人無常。答落生故。涅槃常不落不生。依仏説言。我見衆生落生。以是故。依仏説落生。是故人無常。

〔正〕 復次に、何故、ブドガラは無常なのか。  
〔他〕 「ブドガラが」没し生じるからである。それに対し涅槃は常であり、没することもなく、生じることもない。  
仏が「私は衆生が没し生じるのを見る」と説かれているからである。

仏が「衆生が」没し生じる」と説かれているから、それ故、ブドガラは無常である。

この經典はⅡ①でも引かれた中阿含64天使經(大・1・503・上以下)及び M. 130 Devadūta S. に対応する一節がある。「我亦如是。以淨天眼出遇於人、見此衆生、死時生時、好色惡色、成妙不妙、往來善處及不善處……云云」とある。

ホ 生老病死する

復次何以故人無常。答生老病死法故。

〈正〉復次に、何故、ブドガラは無常なのか。

仏言。我是無數四部衆善知識。以生

〈他〉生老病死するものであるからだ。

死故來至我所得脫生死。生老病死は無常法。是故人無常如是。

仏が次のように説かれている——私は、無数の四部衆の善知識である。彼等は、生まれたり死んだりするということがあるので、「それからの解脱を希求して」私の許へやって来て、そこで生死「の苦」から脱することができた、と。

生老病死するものは無常法である。それ故、ブドガラは無常である。

#### 5 他部派の見解のまとめ

是故從此修多羅以為本。有說無実我如是。有言不可說有我如是。有說有我如是。是故我等生疑。雖然為当実有我。為仮設而已。以是故。有說五陰是我。有說我異五陰。有說常。有說無常。如是。是故我等生疑。

以上述べてきたように、様々な經典に従って、それを根拠として、或る者は実体としての我は存在しないと主張し、或る者は我が存在するとも「存在しないと」言ってはならないと主張するし、又或る者は我は存在すると主張する。それ故、我々は疑いを抱くのだ。

又、その上、そのように我が存在するとしても、実体として我が存在するの、それとも単に仮設として存在するに過ぎないのか、ということ、或る者は五蘊が我であると主張し、或る者は我と五蘊とは別のものであると主張する。しかも或る者は常であると主張するし、或る者は無常であると主張

する。それ故、我我は疑いを抱くのだ。

補注 因に偈の全体を示してはこう。

ayohanahatass'eva jalato jātavedasso

anupubbūpasantassa yathā na nāyate gati

evam sammāvinitānaṃ kāma-bandhaghā-

riṇaṃ

paññāpetum gati n'atthi pattānaṃ acalaṃ su-  
khaṃ

引用されている部分の冒頭の「如是」が受けている比  
喩の内容が分かる。

ネハールが本と誤